

# 香川県綾歌町の農産物加工・直販活動

山口 理沙子

## 1. はじめに

近年の都市近郊農村では、高度経済成長期やバブル経済期にみられた兼業化の進行と農業人口の減少が依然として続いており、農村における伝統的地縁地域社会に依存した生活様式は変容しつつある。その一方で、地縁の関係を大切にしつつ、新たな地域社会の創造が進行している。

本稿では、香川県綾歌郡綾歌町を対象として、農産物の生産、加工、販売活動を通じた地域社会の維持・活性化と、それが個人レベルで持つ意義について考察する。本稿は、地理学コース3年生正課教育「地理学野外調査Ⅰ」において杉谷教官指導のもと、2000年7月20～23日に学部学生とともに聞き取りと参与観察を行った結果の一部である。全体の報告は、杉谷・内田編(2000)『香川巡検報告書』(地理学コース発行)に収められている。

## 2. 綾歌町の概要

綾歌町は、高松市の西方約20 kmにあり、琴平電鉄が貫通している。面積は約27 km<sup>2</sup>である。人口は2000年現在で約12,000人だが、近年は高松市への通勤者を対象として宅地開発が進んでいるために増加傾向にある。産業構造は、第1次産業14.5%、第2次産業30.8%、第3次産業54.6%である(1995年国勢調査)。

農家戸数は、1975年には専業100、第1種兼業427、第2種兼業1040、総数1577戸であったが、1995年にはそれぞれ、140、91、1,089、総数1,320戸となった(1975、1995年農業センサス)。第1種兼業農家が大きく戸数を減らす一方、専業農家は定年帰農者と判断される微増が見られる。

綾歌町が「農業と観光の町」を目指して南部に開業した、四国最大のアミューズメント・パーク

であるレオマワールドは、経営不振のため2000年9月に休園した。

## 3. JA岡田ふれあいセンター

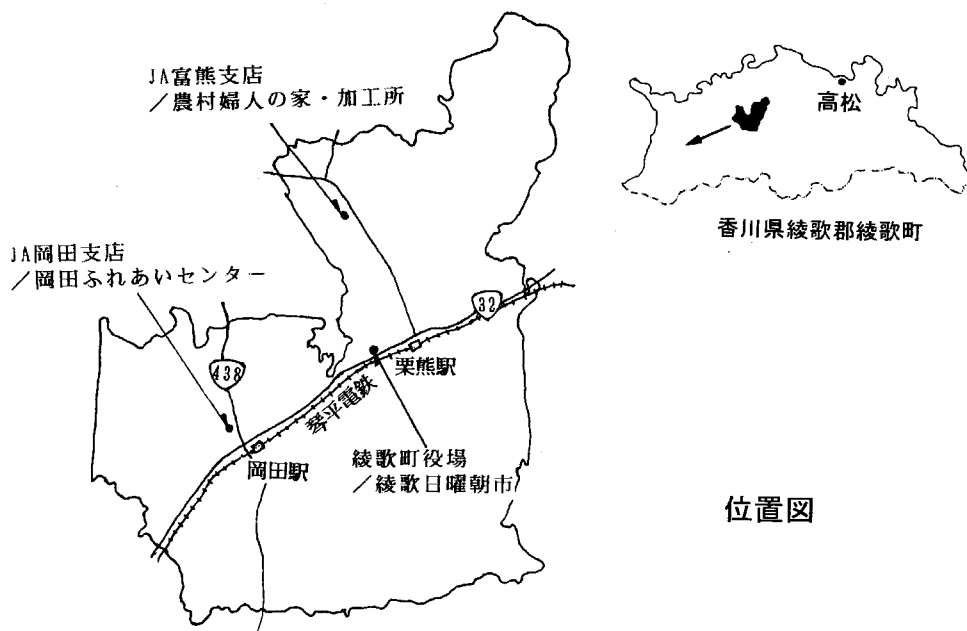
JA岡田は琴電岡田駅から徒歩約5分にある。同ふれあいセンターは直売所として、近接した敷地内に政府補助金を受けて建設された。

センターの営業時間は火～土曜日の8:30～16:30であり、生産者の商品搬入作業は7:00の開錠直後に行われる。調査は2000年7月20日7:00～11:00、21日7:00～9:00に行った。7:00には、数十分前から5、6人の生産者がセンター前で待機していた。聞き取り対象者は、30～80歳代の生産者男女10人である。

ここでは、平日は主婦が子供の通学に同行するついでに品物を置いていき、休日は、平日勤めに出ていて時間のない人が出荷している。平日と休日とでこのように属性は変わるが、毎朝平均約40人前後の生産者が出荷している。売上げは、生産者ごとに与えられたバーコードで管理されている。

直売所は、消費者にとって新鮮、安価、安心であるという特徴があるが、生産者側の利用価値も大きい。販売代金の1割の手数料を納めれば気軽に出荷できるので、高齢女性、男性の定年帰農者、主婦、地元専業農家の他、兼業農家など、様々な営農規模と幅広い年齢層の生産者をひきつけている。また、「地元の人に対して提供できる」(男性65才)、「家が近くて通いやすい」(女性75才)といった話から、同センターが特に地元の人を対象とした直売所として機能していることがわかる。

商品は、野菜、果物、花卉、農産加工品、菓子、惣菜、健康食品として近年注目されているウコン・モロヘイヤ粉末(センターでグラインダーを購入)、岡田地区にある店が製造・出荷している豆腐・うどんなどである。地元専業農家は、地元



位置図

の人に安く、バラエティに富んだ品物を提供しており、花卉は特に人気がある。勤め女性や主婦の場合、自家菜園作物の出荷による副収入を目的としている。一方、高齢女性は、栽培が比較的簡単で需要も見られるため農協からも推奨されている、モロヘイヤなどを栽培し出荷している。

高齢女性や定年男性は、センターで他者が出荷した作物の出来や値付けをよく観察しており、同センターでの出荷に品評会的要素を求め、それに生きがいを感じている。また、「売れているとうれしい」と感じた生産者が、センターに通うことによって、他の生産者同士と顔見知りになり会話を交わすようになり、栽培・出荷の情報交換から世間話までを行うようになるようである。しかし、大半はあくまでセンター内のみの交流に留まっている。しかし他方で、農協主催の旅行に出かけるなどして、岡田地区やその他の地区との交流を持つ積極的な人もいようである。なお、センターが賑わうのは搬入の始まる7:00すぎから8:30である。これには、搬入後の生産者同士が立ち話をし、ついでに買い物をしてレジの女性と会話を交わしている例が含まれる。

出荷を目的としながらも、同センターが、特に高齢女性や定年男性の地域交流範囲を広げる役割を担っているといえるだろう。

#### 4. 「あやうた日曜朝市」におけるカウンター特産品加工部の活動

この朝市は、1994年から地域活性化・遊休地の活用を目的として、毎週日曜日7:00～11:00に綾歌町役場前で開催されている。主催者は綾歌日曜市運営委員会、会長は経営手腕を問われて商店経営者があっている。出品者は、搬入時に伝票に品名と量を記入する。朝市が終了したときに係の者が残数を検査し、その差から代金を計算して出品者の口座に振り込んでいる。出品者は、JAよりも入金が早いことを評価している。

ここでは、農産物を中心とした商品と並んで、弁当や惣菜といった農産物の調理・加工品を販売する46～72歳までの10人の女性で構成されたグループも出店している。今回の調査では、この活動を主対象として7月23日午前4:00からの調理・包装・陳列（グループ自体は午前3:00から作業）、さらに朝市でのタコ焼き・大判焼き販売を手伝いながら、聞き取りを行った。調査日には朝市への総来客数532名、売上金73万円があった（レジの売上伝票の集計による）。

この女性グループはまた、土・日の2日間で朝市への出店準備・後片付けと、お年寄りへの弁当

配達などを全てボランティアで行っている。また、加工品の材料は、地元綾歌町の特産品を積極的に取り入れたり、メンバーの自家菜園で採れたものを持ち寄るなどの工夫をしている。また、特産品のハッサクとモモを使ったゼリー（考案中）などの新製品の開発・改良の研究にも、意欲的に取り組んでいる。

グループのメンバーへの聞き取りでは、「作業は朝早くてしんどいけれど、お店に立ってお客さんと会話することが楽しい」こと、開発・改良の成果が即座に売上に反映されるやりがい、継続的な活動を支えている。

## 5. 農村婦人の家

JA女性部で構成された組織が、JA支店に隣接する「農村婦人の家」という建物を拠点として活動している。主な活動は、会員の遊休地や転作田で栽培した大豆を原料とした、自宅用の味噌・豆腐の製造である。

現在、JA女性会員約3,000人を対象として、作業工程ごとに分担を割り振っている。勤めなどで作業に加われない場合は、資金提供の形で協力している。作業では、嫁は豆腐作り、姑は味噌というように工程を割り振る配慮をして、同年代女性の交流の場となっている。

現在のところ、農産加工品を販売することは、観光地である琴平に近接して衛生管理の規制

が厳しいので、行われていない。また、兼業農家の女性には、活動以前に外勤めで収入を得る必要があるので、現在の活動範囲に留まっているようである。

## 6. おわりに

綾歌町では、以上のように農業に基盤を置く活動が、地域の人々の結びつきを強めている。しかし一方では、高松市への通勤通学者の新規転入が見られ、それら新住民との地域活動が分断されている現状もきかれた。町は新住民に対して、遊休農地を貸し出す制度も始めている。この制度は、農地を高度利用するだけでなく、農業を通じたもう一つの地域内交流へと広がる可能性を持っている。

## 謝 辞

調査では、JA飯南支部生活課の口入田美恵子さん、あやうた日曜朝市・カントリー特産加工部の方々ほかの関係者には、大変お世話になった。厚く御礼申し上げます。

---

やまぐち・りさこ

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科  
発達社会科学専攻・地理環境学コース